

発表原稿

こんにちは。滋賀県とオンラインで相談をお受けしている、自然派獣医師の今村香です。
本日は、糖尿病と診断された猫と、高血糖が続いていた猫の2例について、レメディを使用した期間の経過をご報告します。どうぞよろしくお願いいたします。

1例目は、14歳の雑種の女の子です。
2025年11月に、「糖尿病でインスリン治療を受けているが、できれば注射を卒業したい」というご相談がありました。体形はやや肥満傾向でした。

大きな手術歴や病歴はなく、避妊手術を受けています。もともと便が硬めというお話もありました。

2025年4月ごろから飲水量と尿量が増え、かかりつけの動物病院で糖尿病と診断されました。その後、インスリン治療が始まり、5月からは1日2回の注射で血糖値が安定していました。

相談時に選択した主なレメディは、
Nux-v、ナックスボミカ LM2、
Carb-v、カーボベジ LM3、
そして Syzyg、シジギウム 30C です。

Syzyg については、当初マザーチンクチャーの使用を考えたが、この症例ではレメディを選びました。ナックスボミカは肝臓ケアに、カーボベジは体に酸素を補い代謝をあげるために選んでいます。

猫さんの糖尿病は人の2型に類似しているために、インスリン抵抗性が高いことが原因になりますので、ドライフード中心の食事これは炭水化物の割合が高いことが多いので、から、缶詰と手作り食を組み合わせた食事へ変更していただきました。また飼い主さんには、ご自宅で飲水量と尿量も観察していただきました。

その後の経過は良好で、かかりつけ医の管理のもと、インスリンは1日2回から朝1回へ減量されました。

2回目の相談会では、便が硬く、排便時に強くいきんで嘔吐することが増えたという相談が追加されました。こちらは便秘への対応として Op、オピウムを追加しました。ほかのレメディは継続しました。

その後、インスリンの投与は終了となりました。投与終了後も、確認した範囲では血糖値の再上昇はみられず、体重が減って活動性も増しました。飼い主さんからは、毎日の注射による負担が軽くなったというお話をいただいています。

2 例目は 3 歳の雑種、男の子。

この子も肥満傾向があり、健康診断で高血糖を指摘されていました。記録された血糖値は、2024 年が 182、2025 年が 204、2026 年が 250 でした。飲水量の増加は目立ちませんでしたが、口臭が強く、歯石もみられました。

この症例でも、Nux-v LM2、Carb-v LM3、Syzyg 30C を使用しました

。

2026 年 6 月には、動物病院に入院して血糖曲線を測定しました。血糖値は 206 から 150 の間で推移し、その時点ではインスリン注射を開始せず、食事管理などを行いながら経過をみる方針となりました。ただし、尿糖は引き続き検出されています。レメディも継続中です。

2 例のまとめです

近年、犬や猫における糖尿病の発生頻度は増加傾向にあり、その多くでインスリン投与が不可欠とされています。

猫の糖尿病においては、全体の飼育頭数の 0.5～1%で、特に 10 歳以上では 1.8%に増えています。糖尿病のタイプは人の 2 型に近く、インスリン抵抗性による高血糖状態になります。つまり、肥満や生活習慣病としての側面が強く疑われる状態です。

本発表の症例 1 では、食事内容の改善および適切な体重管理を併用して、インスリンの抵抗性を改善することができました。

一方、症例 2 では高タンパク質のドライフードを摂取していたものの、若年期より高血糖が認められたことから、遺伝的・体質的な素因の関与が示唆されます。しかし、ホメオパシーの活用により悪化することを防いでいることができた。

糖尿病に用いられるレメディは多岐にわたるが、本 2 症例においては、膵臓機能への親和性と糖代謝改善で知られる *Syzygium* (シジギウム) を中心に処方を行いました

レメディの投与により、血糖値が正常範囲に戻ったものもあれば、上昇傾向が納まった程度のものであるが、おおむね猫の糖尿病にもレメディの投与による改善がみられ、今後の一般的な治療に加えて、より生活の質を向上させるのに役立てると思いました。